

主を運ぶ器となる

(マタイ21・5)

一、マタイ21・5をめぐって

主イエス・キリストは十字架で贖いの死を遂げるために、紀元30年の逾越の祭りが始まるうとしている週に、エルサレムに入られました。その際、子ろばに乗って入られたことは、私共が良く知っていることです。その出来事が、主が預言者を通して語られたことが成就するためであったと記しているのは、マタイの福音書とヨハネの福音書です。

マタイの福音書21章4節、5節を見てまいります。このことが起こったのは、預言者を通して語られたことが成就するためであった。「娘シオンに言え。『見よ、あなたの王があなたのところに来る。柔和な方で、ろばに乗って。荷ろばの子である、子ろばに乗って。』」とあります。ヨハネの福音書には、こうあります。〈ヨハネ12・14〜16〉

続いて、預言の成就の元になったゼカリヤ書9章9節を見てまいります。

娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。とあります。預言者ゼカリヤは、平和をもたら

す王が来ると語りました。ですが南王国が滅亡して以来、主イエスの時代までイスラエルが独立したことはなく、常識的に考えるなら起こり得ないことでした。ところがこの預言は、主イエス・キリストにおいて成就したと、マタイとヨハネは語っているわけです。

二、イメージで捉える

今年の標語の「主を運ぶ器となる」は、「聖書にこう書いてあるからこれにする」という意味合いで決めたものではありません。イメージを優先させて決めさせていただきました。

主イエス・キリストは、十字架にかかられた週の初めの日にろばの子である子ろばに乗ってエルサレムに入城されました。その光景のイメージを捉えて、「主を運ぶ器となる」を考えていただきたいです。私共、すなわち主イエス・キリストを神、また救い主と信じている者、また教会は、イエスキリストをお乗せする子ろばです。主イエス・キリストという、生ける神のことばをお乗せしているわけです。

三、主を運ぶ器となる

では、私共が主イエス・キリストをお乗せする子ろばであり続けるためには、どうしたらよいのでしょうか。それは、聖書に聴き、聖霊によって主と交わることです。そのためには、まず礼拝がた

いせつであると考えます。礼拝は、賛美を献げ、祈りを献げ、聖書からの解き明かしがなされることによって、父・子・聖霊なる神との交わりの中に導き入れられる不思議な時間であり、空間です。礼拝の中で欠かすことのできないものは聖書からの解き明かしですが、これは教会の祈りが必要とされます。

聖書に聴くとは、聖書の全体に聞くことです。これがなかなかたいへんなことでもありまして、だからこそ、主によって立てられた牧師、また教師による説教が必要になりますし、皆さま方の祈りが必要となります。

聖書に聴くとは、私の持論でもありませんが、どのテキストも聖書の全体に飛び込む窓口です。たとえば、きょう開いている聖句から、「主イエス・キリストは柔和な王である」ばかりを強調しますと、当然のこと、主イエス・キリストの御姿が分からなくなります。ひいては、主イエス・キリストを通して見ることでできる神の御姿が分かりません。

きょうは、マタイ21章5節を開いています。その後の出来事をご覧ください。12節、13節です。〈マタイ21・12〜13〉これが「柔和な王」の別の面です。マタイ21章5節に記されている「柔和（ブラユス）」は、文字通り「柔和」の意味がありますが、ゼカリヤ書からの訳語の関係で見ますなら「貧しい、あわれな」の意味も含まれます。という

ことは、ある箇所、主イエス・キリストが柔和でやさしく、且つ貧しく、あわれにさえ見えるお方であると書かれている場合、それは正しいのですが、主イエス・キリストのすべてを現しているとは言えないわけです。

神を信じるという場合、私共が思い描くイメージの神ではなく、神御自身が示された姿を受け入れて行く必要があります。出エジプト記20章に、「あなたは自分のために偶像を造ってはならない」とあります。これは、主イエス・キリストを通して父・子・聖霊なる神を信じたら、卒業したことばと言えるでしょう。か。言えないと思います。自分一人だけで神の姿を、みこころに添ったかたちで思い描きつつけるのは、むしろ不利です。そういう意味で、教会は単立よりも、グループを形成していただく方が有利です。その目指すところは、足して二で割るのではなく、互いのちがいを知ることです。こうして、世界規模の教会が、すなわち東ローマ教会の流れも西ローマ教会の流れもその他も含めて——異端とは交わることができませんが——父・子・聖霊なる神を描いているのだと思います。

この神、すなわち主イエス・キリストによって御自身を現され、父・子・聖霊として御自身を現しておられる神を信じ、あがめ、交わり、お従いして行くときに、私共は、主を運ぶ器とされます。